

母親の自己肯定感を高める「子育て生活スキル伝承型」支援モデルの可能性

—伝統技能伝承のあり方の検討より—

○ 日本女子大学学術研究員 氏名 西岡 弥生 (008363)

キーワード：自己肯定感，子育て生活スキル，伝統技能伝承

1. 研究目的

子ども虐待死の背景に、家事や養育能力の低さと対人関係の築きにくさが相まって、育児不安や精神不調に陥る養育者の危機状況がある。本研究の目的は、子ども虐待防止に向けて、母親が子育てに必要な生活スキル（以下、子育て生活スキル）を他者との関係性のなかで習得し、自己肯定感を高める支援体制の枠組みを検討することである。具体的には、伝統芸能・技能文化（以下、伝統技能）伝承のあり方を関連文献から検討し、「子育て生活スキル伝承型」支援モデルの可能性を見いだす。

近年の育児機能の非伝承性において社会的な施策が必要となり、そのあり方が論じられてきた（林 1996）。児童福祉法等の改正（2016）では、児童の主体的な権利が明示され、子どもの養育は保護者のみならず地域社会、すなわち社会全体で担い協働する子育ての社会化が示された。しかし、現代の子育て家庭は、所得格差とひとり親家庭の増加によって安定層と不安定層に二分化され、支援と介入の二重基準の下におかれている（西岡 2017）。不安定層の母子家庭においては、不安や負い目から他者に悩みを相談しづらく、悩みを多く抱える母親ほど自己肯定感が低くなり、支援を求めない傾向にある（清水 2016）。一方で、母子生活支援施設の調査によると、4割以上の施設が母親の養育技術を支援の課題とし、親子再統合においても家事や生活スキルの支援を課題にあげている。

以上から、生活経験が乏しく十分な教育を受ける機会が得られなかった母親が、子育てに支障をきたした状況が示唆される。母親の自己肯定感の回復には、支援者との関係性のなかで基本的な生活習慣を身につけ、経験の幅を広げ、学びを深めることが重要になる。

2. 研究の視点および方法

研究対象は、技能伝承において身体的動作を介した相互行為及び社会関係を取り結ぶ状況を捉えることができる古典芸能とした。研究方法は、古典芸能の技能伝承のあり方（以下、伝承）について、関連文献から検討した。具体的には、まず、①主な担い手が女性であり、疑似家族的環境で育成される芸舞妓の日本舞踊の伝承について検討した。次いで、②主な担い手は男性で、直系的家族関係において育成される能楽の伝承について検討した。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守し、倫理的配慮を行った。関連文献の検討では、自説と他説とを峻別し先行業績の上に新たな知見を積み重ねるよう取り組んだ。

4. 研究結果

①日本舞踊の伝承：舞妓の場合（西尾 2006）

- ・芸舞妓志望の若年層の女性達が地域に根差した技能伝承システムによって育成され、疑似家族的な共同生活の「妹」として、「姉」である先輩女性から生活様式や文化風習を学ぶ。「母」と呼ばれる熟練育成者が彼女達の親代わりとなる。「妹」と「姉」は職務の舞について、技能指導者・関連業者等から評価を受けながら成長を見守られ、舞の上達を承認されることで、地域の支援的な関係性のなかで自己肯定感を高め自立する。

②-1 能楽の伝承：あるシテ方（演じる側）家系の場合（萩原・槇田 2014）

- ・直系家族における伝承であるが、子どもは父から習うのではなく祖父から習う。父は子どもを祖父に託す。教える側は師匠から習ったことに、自身が経験したことを付け加えることはしない。教わる側は教わったことを軸に、自分の芸（技能）を見つめていく。

②-2 能楽の伝承：ある小鼓の囃子方（後方で演奏する側）家系の場合（萩原・槇田 2014）

- ・囃子方はシテ方に対し屏風のような存在。「目立ってもいかんし、引き立てなあかんし、邪魔になってもあかん」＝囃子方はシテ方について全ての知識をもつことが必要になる。
- ・囃子方に支えられるシテ方も、囃子方の知識を身につけることが必要である。支え手の状況を知らなければ、本番のいざという時に希望に則した具体的な注文ができない。

5. 考察

まず、①から、図1の子育ての社会化モデルを考案する。次いで②-1から、a 子育て生活スキルを伝える際には、基軸になることを伝えるに留め、母親が自身の子育てのあり方を見つめることを大切にすること、b 子育ての教育的側面の一部を祖父母世代が担うことで、親子間の緊張が回避され、安定した関係を維持することが示唆された。また、②-2の囃子方を支援者に例えると、a 支援者がパワーを持ちすぎず母親の動きを妨げない支援を心がけることで、母親の内省が深まり自律性が促される、b 母親に支援者や地域の情報を適時伝えることで、母親と協働の子育ての体制が構築される、などが示唆された。以上から、伝統技能伝承の検討によって、生活経験の乏しい母親が、他者との関係性のなかで、子育て生活に必要なスキルを習得する「子育て生活スキル伝承型」支援モデル考案の可能性が示された。

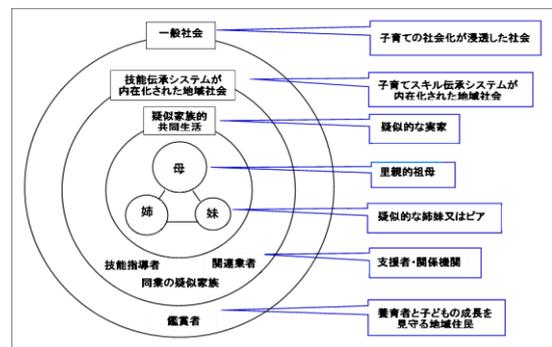


図1.技能伝承のあり方を援用した子育ての社会化モデル（西尾（2006）を参照し筆者作成）

- ・萩原麗子・槇田盤（2014）『京都芸術センター叢書一 継ぐこと・伝えること』京都芸術センター
 - ・林浩康（1996）「現代社会における育児とその社会的支援」『北星論集（文）』33, 37-59.
 - ・西尾久美子（2006）「伝統文化産業におけるキャリア形成と制度：京都花街の芸舞妓の事例」
<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/thesis/d1/D1003638.pdf>（2019.5.5 閲覧）
 - ・西岡弥生（2017）『「心中による虐待死」の社会福祉研究—ファミリーソーシャルワークの必要性—』博士論文、聖隷クリストファー大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程、児童・家庭福祉学分野、181頁
 - ・清水冬樹（2016）『「相談」とつながらない母子家庭の母親たちへの支援の視点』『福祉社会開発研究』8, 85-94.
- ※本研究は、科学研究費助成事業若手研究課題番号 19K13987 の研究成果の一部です。記して感謝申し上げます。